三国の歴史講座　2015年　10月　第2回

川端での暮らし・・・コウド「河戸」について

---洗い場から船着場まで川沿いの生活今昔---

2015.10.24 三国史学研究会　竹島義一

はじめに

資料Ⅰ.文章の中に描写された河戸の風景

「ＭＩＫＵＮＩＢＵＮＫＡ」三国湊憧景コラム　氷見君江氏「こうど」より

竹田川の流れに沿って“こうど”と呼ぶ洗い場がありました。昔は水道がなかったので、こうどは私たちの生活の場、台所の一部でした。野菜洗いから洗濯まで、どこのこうども朝早くから夕方までにぎわいました。鍋やお釜のすす落としの他、らっきょ漬けが始まると砂や黒い皮のついたラッキョを大きい竹のざるに入れてごしごし洗いました。赤ちゃんがいる家では、おむつは決して家で洗わず、冬でもスコップで雪をかき分けこうどに行って洗ったものです。

上の洗い場（おむつなどは下の方で洗う）とこうどの使い方、行儀を教わったものです。子供たちも泳いだり、石垣から顔を出す蟹とり、列をなしてくるメダカすくい、台所から持ち出した“めかご”（小さいざる）の上でぴちぴちはねる3cm程のエビや“きんちゃ”（親指ぐらいの大きさの魚）すくいと、時を忘れて楽しみました。・・・・

「みくに今昔あれこれ　その六」2001年三国今昔懇話会編

竹沢八代重氏８昭和初期よりの森町の変遷）より

・・・・竹田川の三国側は、しゃく谷石で今の出村の思案橋の所まで細い道ががたがたについていて、人一人通るのがやっとでした。川にはフナやメダカがすいすい泳いでいました。友達とよくそのしゃく谷石の細い道でメダカや小さいエビを掬って遊びました。・・・・

「小さな湊町なのに」　宮野力哉著　1986年サンブライト出版より

・・通りは幾棟かの土蔵の横を通って川端に出る戸を「たもん」といった。

たもんをぬけ川端に出ると「こうど」といって蔵から蔵へゆきかう仲買人や仲仕の通る通路があった。こうどは笏谷石が敷き詰められ、蔵から川へ突き出した部分がいつのまにか自分のものになったものである。めいめいが自分勝手に川へ突き出したので隣のこうどと比べて高い所あり低い所あり、出っ張っていたり、間があいていたり、凹んでいたりしたが一応人が通れるようにはなっていた。船から降ろされた荷物や、これから積みこむ荷物もすべてたもんで出入りし、こうどが積み下ろしの場であった。

・・・・問屋の蔵前に船を寄せると大声で呼ばわる。と、番頭が駆け出してくる。かわっぱたに建つ小さな仲仕小屋からは、木綿帆布でつくった肩当と手鉤一丁をぶらさげた仲仕がいっせいに飛び出してくる。さっと川端のこうどから厚い歩み板が渡され、米俵が次々と運びあげられる。番頭はカンカンで計ったり、米改めをしている。・・・・

「ふるさとの手帖」坂本豊著　1994年　金津町より

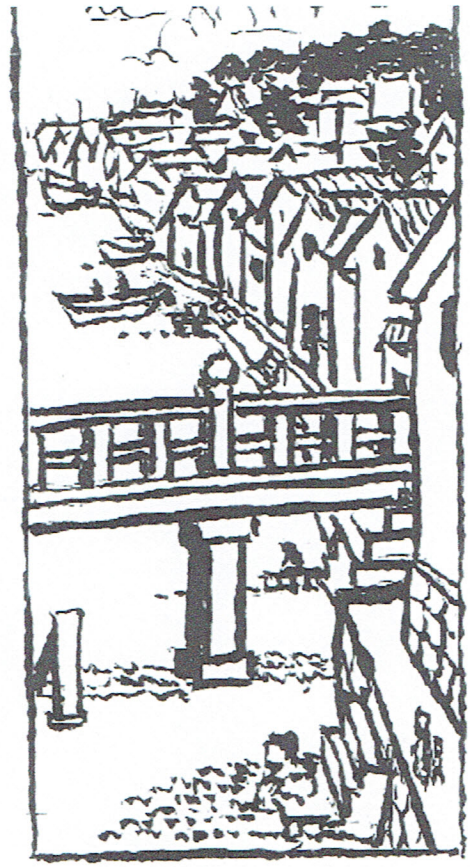
・・・「こうど」は川岸に作った一段低い洗い場のことで、川水を汲むところですから、普通に河戸と書いていました。

・・・川沿いの村々には河戸がありました。・・・特に金津町では水陸交通の要所でしたから、村々の馬方と連携して米穀・石材・瓦・薪木・肥料・雑貨などを運送していたのです。それで大きな河戸には馬洗い場があり、馬道も行きと帰りは別になっていました。川舟は水かさが多い時は、三国から金津を経て、長畝の蕎麦河戸八幡宮までさかのぼりました。深い所では櫓や櫂で進み、浅い所では綱をつけて引舟したり、棹竹で押上げて行きました。・・・・・

上記から川岸に住む人々の日々の暮らしの中で付き合ってきた河戸の姿がうかがえます。河戸の機能は主に「洗い場」と「船着場」であったようです。

資料Ⅱ.写真・スケッチで見る河戸

写真 1.「虹屋」裏の河戸（三国龍翔館提供）
少女が何か洗い物をしています
右横の建物の壁に洗濯物が



スケッチ 1.汐見橋付近
「みくに今昔あれこれ　その六」
2001 年　三国今昔懇話会編
中野珪三氏挿絵

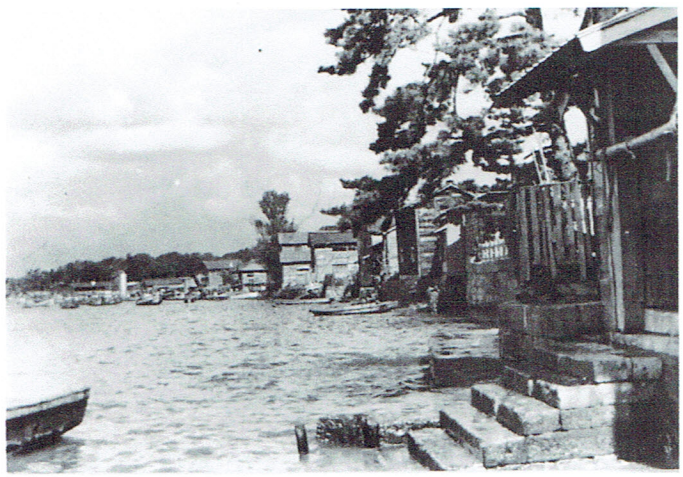
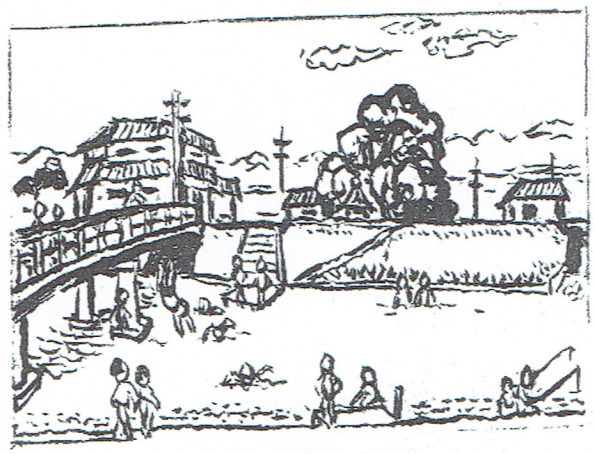


写真 2.永正寺裏の河戸



スケッチ 2.金井橋付近
「みくに今昔あれこれ　その六」
2001 年　三国今昔懇話会編
中野珪三氏挿絵

資料Ⅲ．コウドという言葉

語源について
「コウ」（川、河、江）についてはカワの意味だが、「ト」は出入り口をあらわす。

関連する言語に　「ミト」（水戸）「ミナト」（港、湊、水門）
他に単語の後ろに「ト」のつくものでは、「キド」（木戸、城戸）「イド」（井戸）「エド」（江戸）
「ト」について
　前田富祺監修　「日本語源大辞典」では
　　ト（戸、門）①出入りするところ、出入り口
　　②河口や海などの、両岸が狭くなっている所、　水流が出入りする所
　　語源　止めるの義　閉じるの義　通るの義　殿の反　トントンの音から
　また　白川静著　「字訓」では
　　ト（戸、門）①内外の間や区画相互の間を遮断し、その出入りの為に設けた施設をいう。門を構え戸を設ける。また河や海の両方がせまって、地勢的に出入り口のようになっているところをもいう。「と」は開き戸にするのが普通であった。「と」とは、内外の境のところをいう。

「ツ」（津）との比較
　「ツ」は水を渡る場所を表す渡し場の意であったが、船着場に使われるようになった。
　「ツ」の方が、より広い範囲（外洋含む）　また接岸する船の大きさも、より大きい
　例　大津　金津　木津　柳津　八百津　草津

「ショウズ」との比較
水辺の洗い場として、似ている「ショウズ」と比べてみました。

	「ショウズ」	コウド
土地の条件	湧水の有る所	川・湖・用水・水路の岸
設備	３段階になった利用場	岸までの通路や階段
用途	飲用・食品や食器洗い・洗濯など	船着場・食品や食器洗い・洗濯など

資料Ⅳ．地名に残る河戸

では現在使われている地名の中に河戸はどれくらい存在しているのか。　陸道.
1.大字河戸
まず大字を国土地理院「ウオッちず」「大日本地名辞書」にて検索してみると、
（　　）内は読み　？は読み方未確認

○渡船場あったことが確認できた大字
新潟県新潟市に河渡（コウド）北陸道の阿賀野川岸の渡し場）
岐阜県岐阜市に合渡または河渡（ゴウド）中山道の長良川岸の渡し場）
島根県江津市川戸（カワド）江の川川岸の渡し場
高知県大豊町川渡（カワド）吉野川岸の渡し場

○用水の取り入れ口に由来する大字
愛知県春日井市松河戸（マツカワド）

○地名の由来は確認できないが川岸にある大字
岩手県葛巻町に「古川戸」（フルカワド）＜山形川の岸＞
宮城県大崎市に「川渡」（カワタビ）＜江合川の岸＞
山形県酒田市に「大川渡」（オオカワド）＜最上川の岸＞
茨城県下妻市に「平川戸」（ヒラカワド）＜小貝川の岸＞
埼玉県春日部市に「道順川戸」（カワド）＜利根川支流の岸＞
埼玉県松伏町に「大川戸」（オオカワド）＜江戸川の岸＞
千葉県千葉市中央区に「川戸」（カワド）
山梨県都留市に古川渡（フルカワド）<桂川の岸＞
新潟県長岡市に「大川戸」（オオカワド）＜刈谷田川の岸＞
長野県松本市に「黒川渡」（？）＜奈川の岸＞
長野県松本市に「湯川渡」（？）＜梓川の岸＞
長野県木曽町に「黒川渡」（？）＜木曽川の岸＞
岐阜県下呂市に「川渡」（？）＜飛騨川支流の岸＞
岐阜県高山市に「寺河戸」（テラカワド）＜庄川の岸＞
岐阜県美濃市に「河戸谷」（？）＜長良川の岸＞
岐阜県瑞浪市に「寺河戸」（？）「川戸」（？）＜土岐川の岸＞
岐阜県南濃町上野に「河戸」（コオヅ）もとは郡戸と書いた＜揖斐川の岸＞
愛知県稲沢市に「生出河戸」（コエド）＜日光川の岸＞
三重県松坂市に「中川渡」（ナコト）＜阪内川の岸＞
奈良県五条市に「立川渡」（タテカワド）＜丹生川の岸＞
奈良県川上村に「白川渡」（シラカワド）＜吉野川の岸＞
大阪府羽曳野市に「郡戸」（コオヅ）＜大和川支流の岸＞
兵庫県宍粟市に「川戸」（カワト）＜揖保川の岸＞
岡山県美作市に「川戸」（カワト）＜吉野川の岸＞
島根県江津市に「下河戸」（シモカワド）＜江の川の岸＞
広島県東広島市に「河戸」（コウド）＜沼田川の岸＞
広島県三次市に「河戸」（？）＜江の川の岸＞
広島県北広島町に「川戸」（カワド）＜江の川の岸＞
高知県高知市に「川戸」＜国分川の岸＞

○地名由来不明
岩手県一関市に「川戸」（カワド）
岩手県盛岡市に「下川戸」（シモカワド）
秋田県能代市に「河戸川」（カワトガワ）
宮城県東松島市に「上河戸」（カミカワド）
山形県鶴岡市に「大川渡」（オオカワド）
栃木県さくら市に「上河戸」（カミコウト）
栃木県日光市に「川戸」（？）
栃木県那須烏山市に「川戸」（コウド）
茨城県小美玉市に「川戸」（カワド）
千葉県茂原市に「川戸」（？）
千葉県四街道市に「川戸」（？）
千葉県南房総市に「川戸」（？）
群馬県東吾妻町に「川戸」（カワド）
神奈川県伊勢原市に「神戸」（ゴウド）
愛知県清州市に「春日河戸」（？）
愛知県江南市に「河戸」（コウド）
島根県美郷町に「上川戸」（カミカワド）
高知県仁淀川町に「川渡」（カワド）

以上のことから、わかったこと
コウド、コウトは河戸、川戸と書き、新潟県から広島県にかけて
カワド、カワドは河戸、川戸、川渡と書き、岩手県から高知県にかけて
それぞれ見られる大字地名
コオヅ、ゴウドは「郡戸」と書き、郡家、郡衙を意味する可能性もあり。

2.小字河戸

次に小字を嶺北地域を対象に「福井県史　条理復元図」の地図上で検索すると
（　）内はその小字が存在する大字

竹田川の岸では
「河道」（中番）「山河戸」「内田河戸」（古屋石塚）「馬洗河戸」（南疋田）「蕎麦河戸」（長畝）

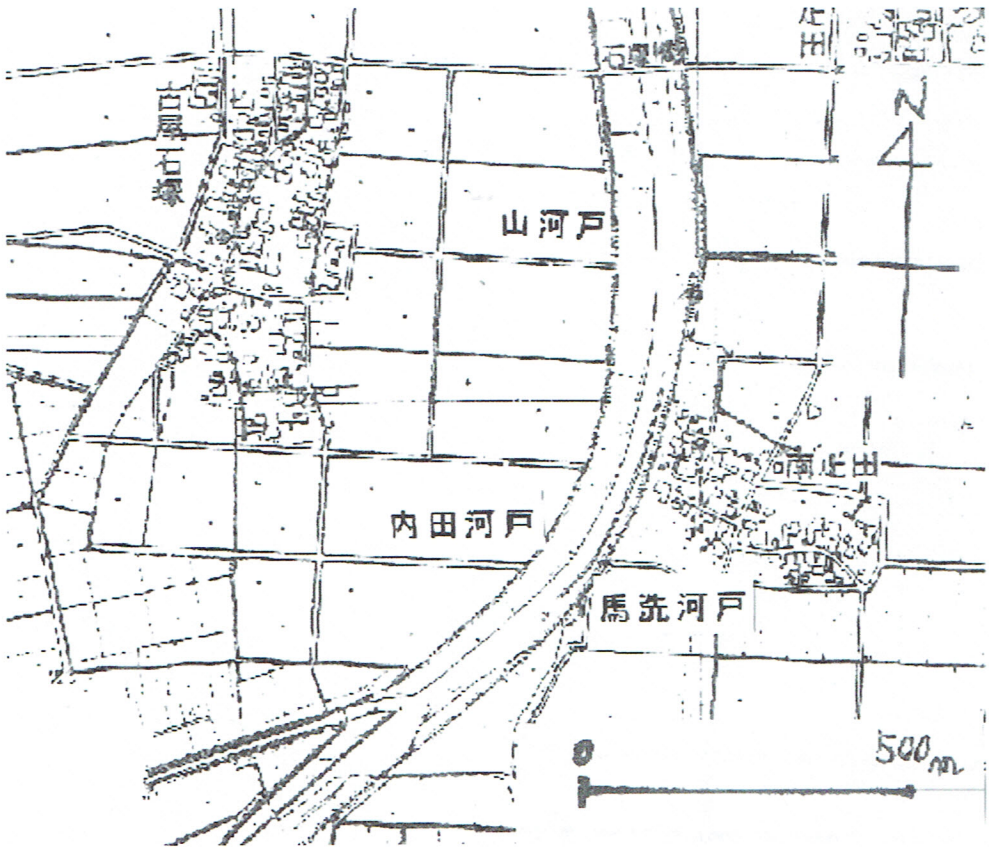


図１　竹田川流域に残る小字地名
金津町「金津町全図」（平成８年）に加筆

足羽川の岸では
「下河戸」「中河戸」「上河戸」（若杉）「西河道」（飯塚）「船河戸」（明里）
浅水川の岸では
「河戸向」（生野）
江端川の岸では
「前川戸」（江守中）「船河戸」「西河戸」（南江守）
日野川の岸では
「船河戸」（片山）「下河戸北」（平井）
北潟湖畔では
「中の河戸」

資料Ⅴ.地図に名前が載らない河戸

地図に載らない河戸について、文献や聞き取りにより、地図に記入しました。

①国・新保地区の河戸

九頭竜川、竹田川の河口にある三国湊は、北前船の寄港地でもありました。重要な中継地として、まず岸に荷揚げする場所が河戸でした。それぞれの小路が川に達した所に共同の河戸があり、また各商家の倉庫の川側に河戸がありましたが、その幅や高さなどが不統一なため、岸に沿って凸凹に続いていました。

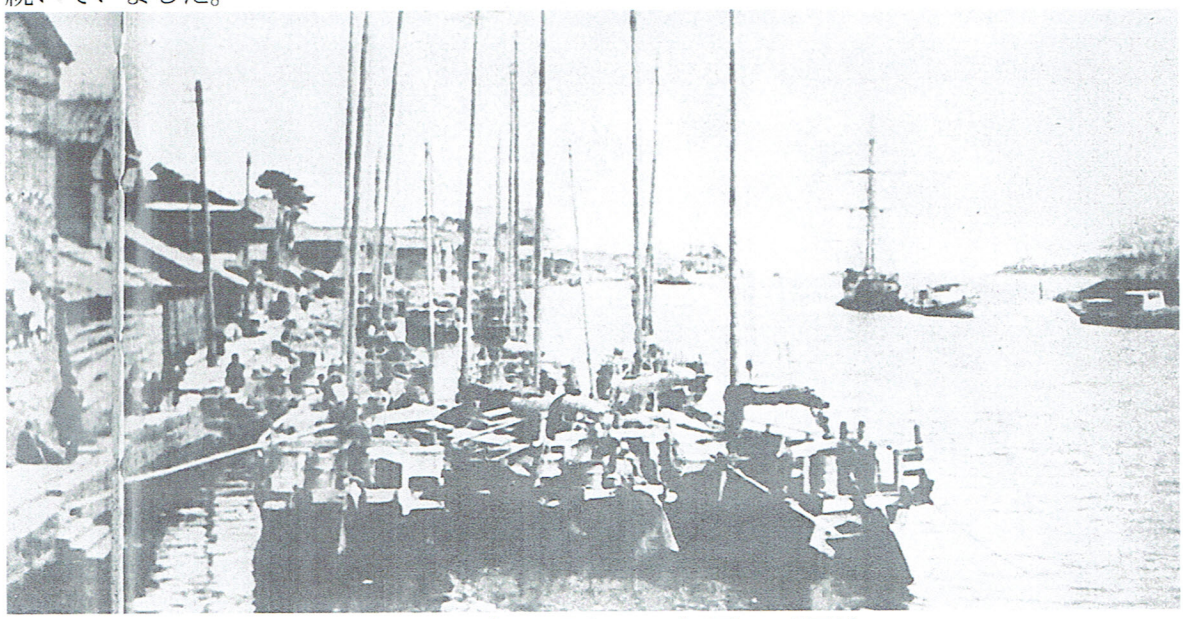


写真 3.昭和１５年頃の三国湊

「写真・福井の百年」日刊福井 1981 年より　左側の倉庫の下に狭く凸凹な河戸が連なる

写真 4 三国湊木場付近

みくに龍翔館写真提供

三国・新保付近の河戸を地図上に記入したものが図２です。

新保～三国、岩崎～鍾鋳、今市～竹松の間は渡し船が通っていました。

②片川沿いの河戸

片川は「潟川」であり、「どす池」と呼ばれた潟と九頭竜川をつなぐ川です。山岸・下野荒井・黒目・米納津には多くの河戸があり、それぞれ自宅～水田間の農作業の運搬に使われ、子供たちの泳ぎの場にもなりました。
また、米納津の河戸は、らっきょを積み込む河戸でした。

山岸には、対岸の川崎へ渡る船着き場がありました。

③三国のその他の河戸

木部地区の集落にも河戸がありました。中でも、鐘井・請地・楽円・池見などには、地籍図を見ると舟溜りがあったと考えられます。
滝谷では洗い場としての河戸が辰巳川に
雄島地区では浜地に
加戸地区では水居に河戸がありました。

図 3.片川と河戸
三国町「三国町全図」2001 年に加筆

④福井の河戸

「河戸」とよばれた船着場が、大橋（九十九橋付近）、木町（九十九橋北詰　花月橋付近）、笏谷（丹巌洞付近）にあり大変な賑わいを見せました。大きな三百石船に積まれた笏谷石や米、 織物などは九頭龍川へと下り、三国港で北前船に積み替えられ諸国へ運ばれました。

また、夏の夜には、尾形船が粋な三味線の音を川面に響かせて往来することもありました。

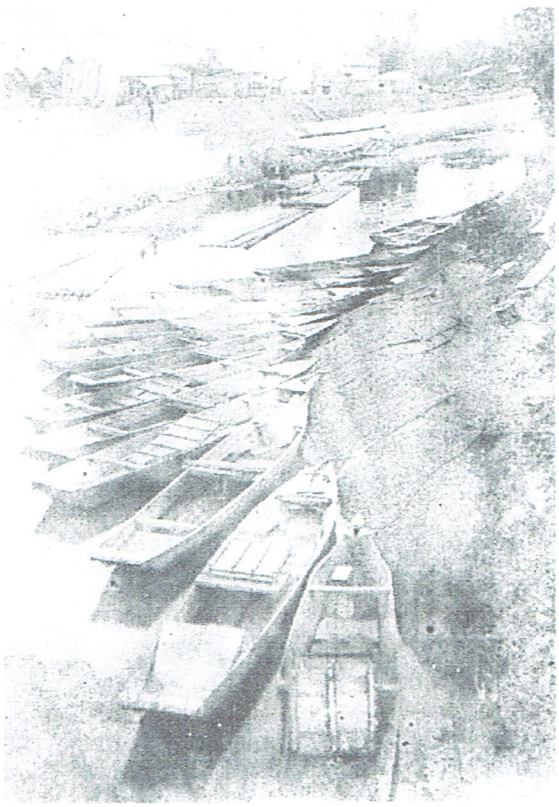


写真５.昭和４年頃荒川にあった舟溜り
「写真・福井の百年」日刊福井 1981 年より
それぞれの舟の碇を岸の斜面に置き、舟止めとしています

⑤金津の河戸
金津は福井藩が定めた三河戸（後の二か所は足羽川の九十九橋下、日野川の白鬼女）の一つであり、北陸道が交差する地点として重要な河戸になっていました。その頃の船着場は市姫付近の河戸でありました。金津には他にも多数の河戸がありましたが、それぞれに名前がついており、八木進氏によって聞取られた各河戸の名前と、大正・昭和初期の様子を下記に引用します。

「坂の下河戸」・・・」12段ほどの福井石尺六の立派な石段で出来ており、船着場兼生活洗い場も三尺板石が十二尺程並べられていて、地域全体に利用されていた。三国から小荷物や川砂・砂利の荷揚げが頻繁に行われた。河戸の向う岸は浅瀬で、坂の下・古両区の馬洗い場として利用され馬河戸と呼んでいた
「みそや河戸」生活河戸兼用の舟繋ぎ場でもあった。終戦後は三国新保からラッキョが荷揚げされ、加工用洗い場として利用された。
「青辰河戸」整備された舟着場で、青辰石材店・岡部商店が主な利用者であった。石材や肥料が荷揚げされ、米が三国湊に積み出された。
「十日河戸」「市姫河戸」この両河戸は町の中央、市姫橋の下手に向き合って、片や六日区・新区、片や南金津中心街の舟着場で、上りの舟では雑貨・海産物・豆粕などが荷揚げされ、地域の商業に大きな役割を果たしていた。
「水口河戸」「桜井河戸」「三段口河戸」この頃はまだ上新橋も浦安橋もなかった。桜井河戸からは米が積み込まれ、三段口河戸では砂利や川砂がおろされた。
「新橋河戸」「八日河戸」「正山河戸」「古町河戸」これらの河戸は、その地域の生活河戸として重宝がられたが、水道や洗濯機の普及と河川改修によって、今は殆ど面影すら見ることはできない。便利にはなったが長閑な風物は消えた。

これらの河戸について、牧田孝男氏に同行していただき地図上にマークしたのが図4です。
図の中に「中仕組創立記念之碑」がありますが、竹田川の陸運・水運を担った金津の中仕達が、新時代に向けての熱い意気込みを込めた記念碑であります。この碑については、印牧邦雄氏とあわら市の長谷川勲氏が調査・研究し、有志グループが現在顕彰しています。

⑤北潟湖の河戸
三国湊と加賀を結ぶ重要な道が「小牧道」でした。三国から小牧までは陸路ですが、小牧から北潟湖～吉崎～大聖寺～小松まで内陸の水路でつながっています。
北潟湖の湖岸には「小牧」「細呂木」「吉崎」の船着き場、「蔵崎の渡し」がありました。明治３５年には細呂木で２５名が渡船業を営んでおり、小牧道が栄えた頃には北潟地区でも常に10艘の川舟が用意されていました。大正7年には北潟村には舟が172腰あったと記録されています。＜北潟村誌昭和11年＞また昭和20年代までは蓮如忌の期間中「吉崎参り」信者を運ぶ舟が「小牧」「細呂木」「クロモゼ」から出ています。
この他にも、農作業の舟が着く「ワシノウラ」、「ハブロド」（中世文書に記載のある「羽室津」）、「オトベ」「ランバ」などが湖岸の共同の河戸となっていました。「中の河戸」もその一つと考えられます。
水田が湖の対岸にあったため、各家には湖岸に舟小屋があり、農作・漁労にかかせない舟をしまっていました。湖岸の水田は地盤が軟弱なため、たびたび客土が必要となり、対岸まで土を運んだが、その土を舟から水田まで上げて入れる作業が特に大変でした。
湖は細長く入り組んだ湖岸線をなしていたため、湖を「カワ」と呼び、その岸辺や近くの畑を「カワンタ」と呼びました。「カワンタ」は洗い物の場所でもあり、畑地は「ハサバ」（稲・大根などの干し場）にもなっていました。
北潟湖付近の河戸についてその位置を記入したのが図5です。

⑥大聖寺の河戸

大聖寺では、河戸のことを「河道」と呼んでいます。
藩政期の大聖寺川には、水夫（かこ）２人が乗り込む川舟が敷地橋・堀切湊（塩屋港）間を往来し、人や物資を運んでいました。川上げ物資には舟才許（ふなさいきょ）亭彦八の送り切手が、川下げ物資には奉行・十村・問屋などの送り切手が必要でした。
明治から大正期にかけて、大聖寺川では塩屋の土を上流の山中町に運ぶ「板舟」が盛んに往来したと伝えられ、大正期にも大聖寺～塩屋間に舟の往来が続き、沿岸の三木村、瀬越村などに農業上必要の肥料を運搬することありました。大正後期には、発動機をつけた巡航船が就航するようになりました。昭和初期の巡航船は、一艘で三艘の伝馬船を曳航し、人を運ぶ場合は巡航船で３０～４０人、伝馬船で一艘につき２０人、つまり一組の巡航船で約１００人を運ぶことができました。
１日６往復で７隻が就航していました。・・・航路は大聖寺町新橋から塩屋村までで、毎年４月の蓮如忌には、大勢の善男男女が吉崎参りのために、大聖寺町からこの巡航船を利用し大変な混雑しました。昭和２２年巡航船が沈没し、１９人もの犠牲がでたことでその後巡航船は廃止されることになります。（「大聖寺町史」より）

⑦瀬越の河戸

瀬越でも、河戸のことを「河道」と呼んでいます。
瀬越は北前船主輩出した村で、大聖寺川の河口近くに在って、舟才許（ふなさいきょ）亭彦八の屋敷や大聖寺藩の米蔵がありました。
大聖寺と瀬越の河戸を図６・図７に示します。

資料Ⅵ.現在の河戸

現在の河戸について、以下の写真を見て下さい。

写真 6.下野荒井河戸

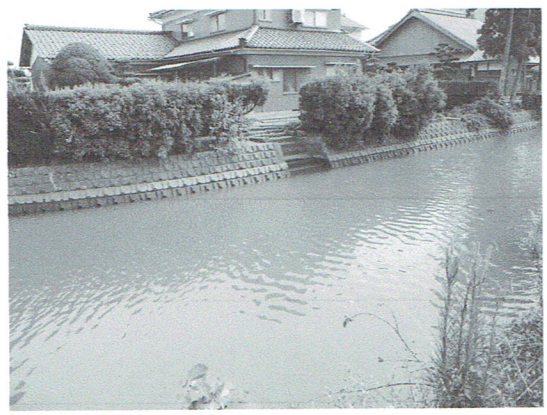


写真 7.黒目河戸

写真７.中の河戸　対岸はオトベ河戸

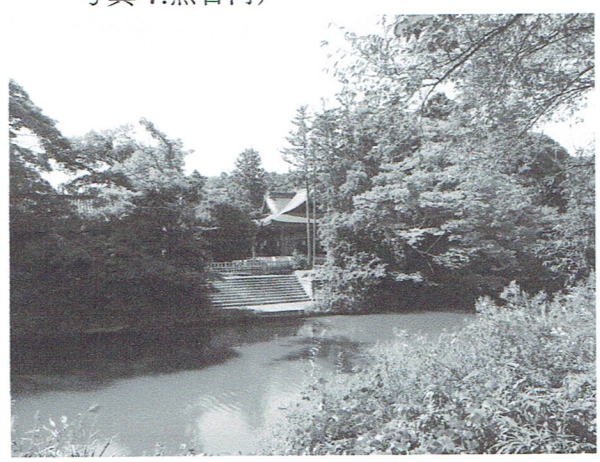


写真８.殿様河道

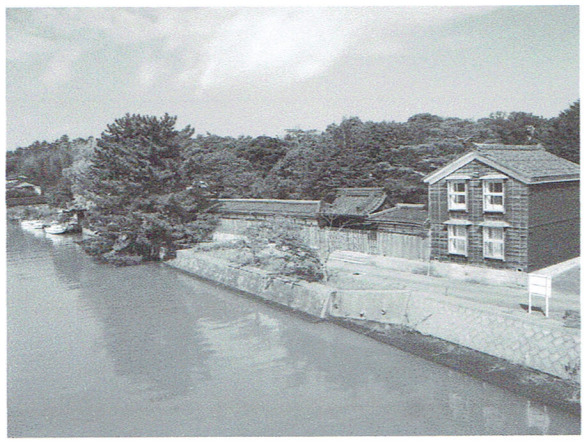


写真 9.瀬越の河道

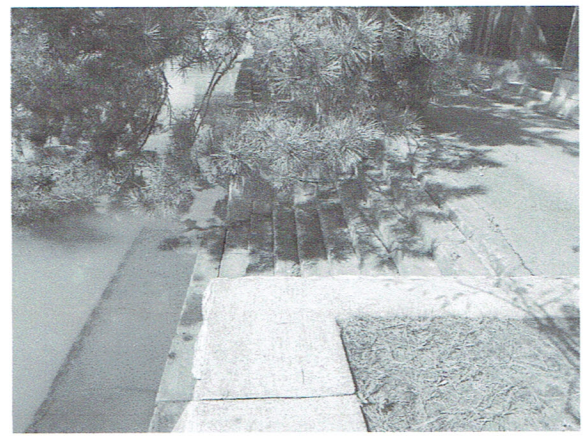


写真 10.瀬越の河道拡大

写真 11.八間道の河道

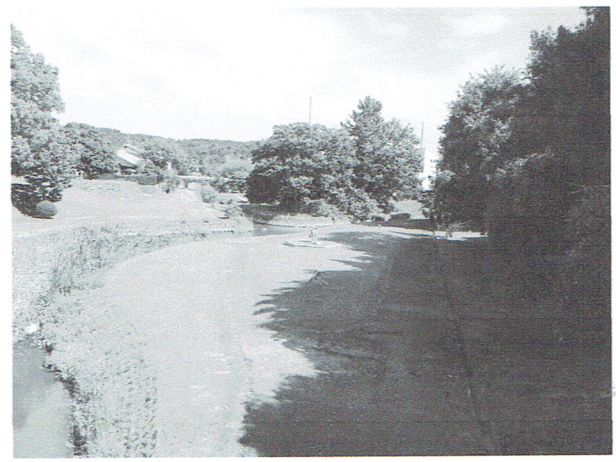


写真 12.旧大聖寺川の河戸と公園

最後に

幾多の舟が着いた河戸は洗い場となり、子供たちの遊び場にもなりましたが、その多くが河川改修で姿を消し、現在残っている河戸も使われることは殆どありません。確かに大雨の際には河川が災害をもたらすこともあります。また今の子供たちが遊ぶには危険な場所かもしれません。河戸があってもそこへの通路を塞いだ所も多く見られます。

河戸の戸は現在閉じられたままですが、河川と上手につきあっていく事で、再び扉を開き、にぎやかな川端の人達の声が聞こえる場所になればと願っております。

参考文献

「ＭＩＫＵＮＩ　ＢＵＮＫＡ」三国湊憧景コラム 24 号 1999 年
「みくに今昔あれこれ　その六」三国今昔懇話会編 2001 年
「小さな湊町なのに」　宮野力哉著　サンブライト出版 1986 年
「ふるさとの手帖」坂本豊著　金津町 1994 年
「日本語源大辞典」前田富祺監修　小学館 2005 年
「字訓」白川静著　　平凡社 1987 年
「増補大日本地名辞書」吉田東伍著　冨山房　1970 年
「写真・福井の百年」日刊福井 1981 年
「福井県史　条里復元図」福井県 1992 年
「三国町の民家と町並」三国町教育委員会 1983 年
「福井県歴史の道調査報告書　第１集」福井県　2001 年
「三国町史」図書刊行会　1983 年
「大聖寺町史」大聖寺町史編纂委員会編集　大聖寺地区まちづくり推進協議会 2013 年

「北潟村誌」　北潟青年学校　1936 年
「芦原町史」芦原町　1973 年
「金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書　上福田と大聖寺川」金沢大　2005.06

聞取りでお世話になった人
三国町の新家貞士氏、氷見君江氏、林俊明氏
あわら市の牧田孝男氏
加賀市瀬越の辻出五月氏
有難うございました

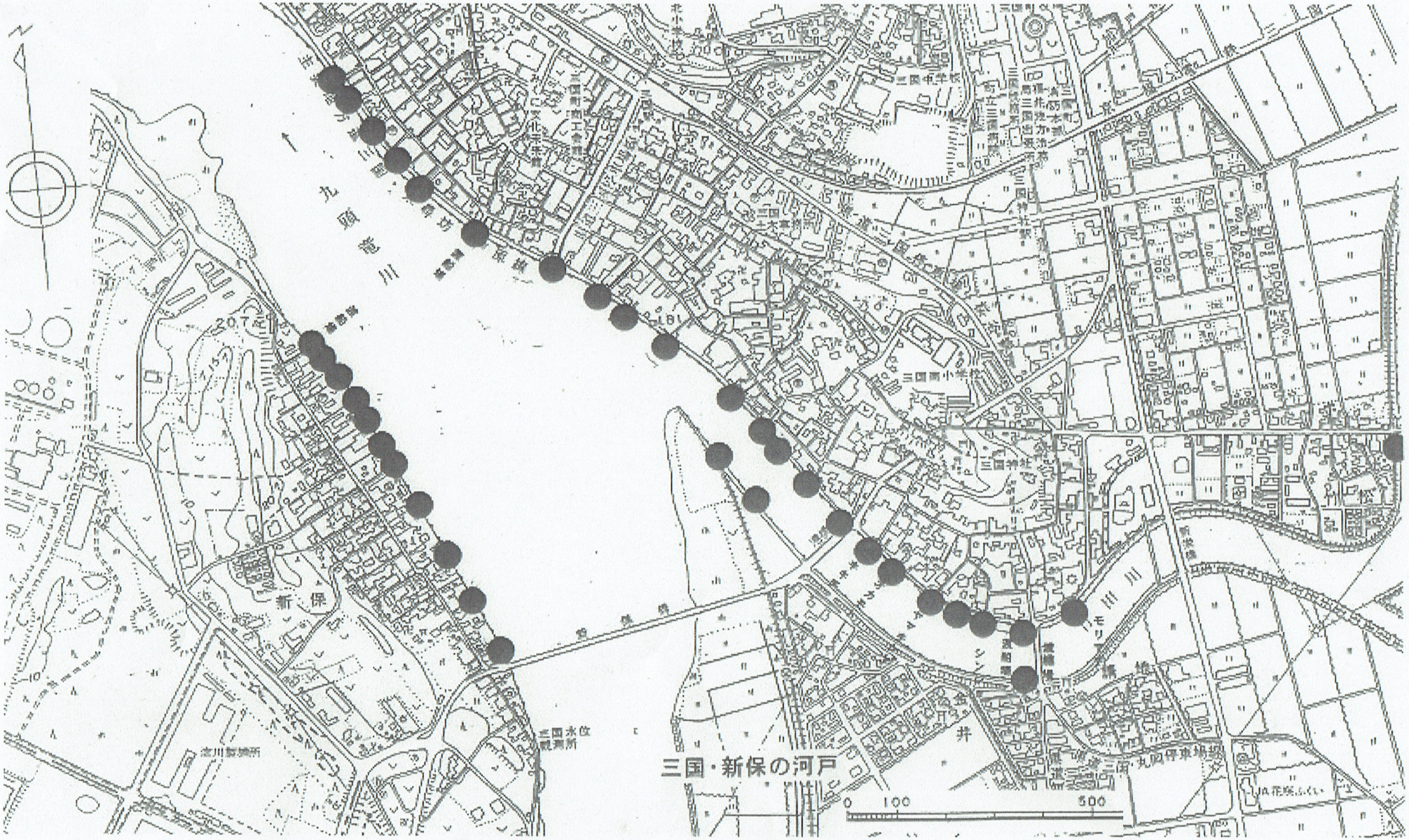


図 2.　三国・新保の河戸

平成 13 年三国町「三国町全図」に加筆　呼び名のわかっている河戸については名称を記載

黒丸は共同の河戸が主、各商店の川岸にはそれぞれの河戸があり、実際の河戸は点状に存在しているのではなく、線上に続いていた

福井～三国の乗客を乗せた船は港橋付近に着いた。

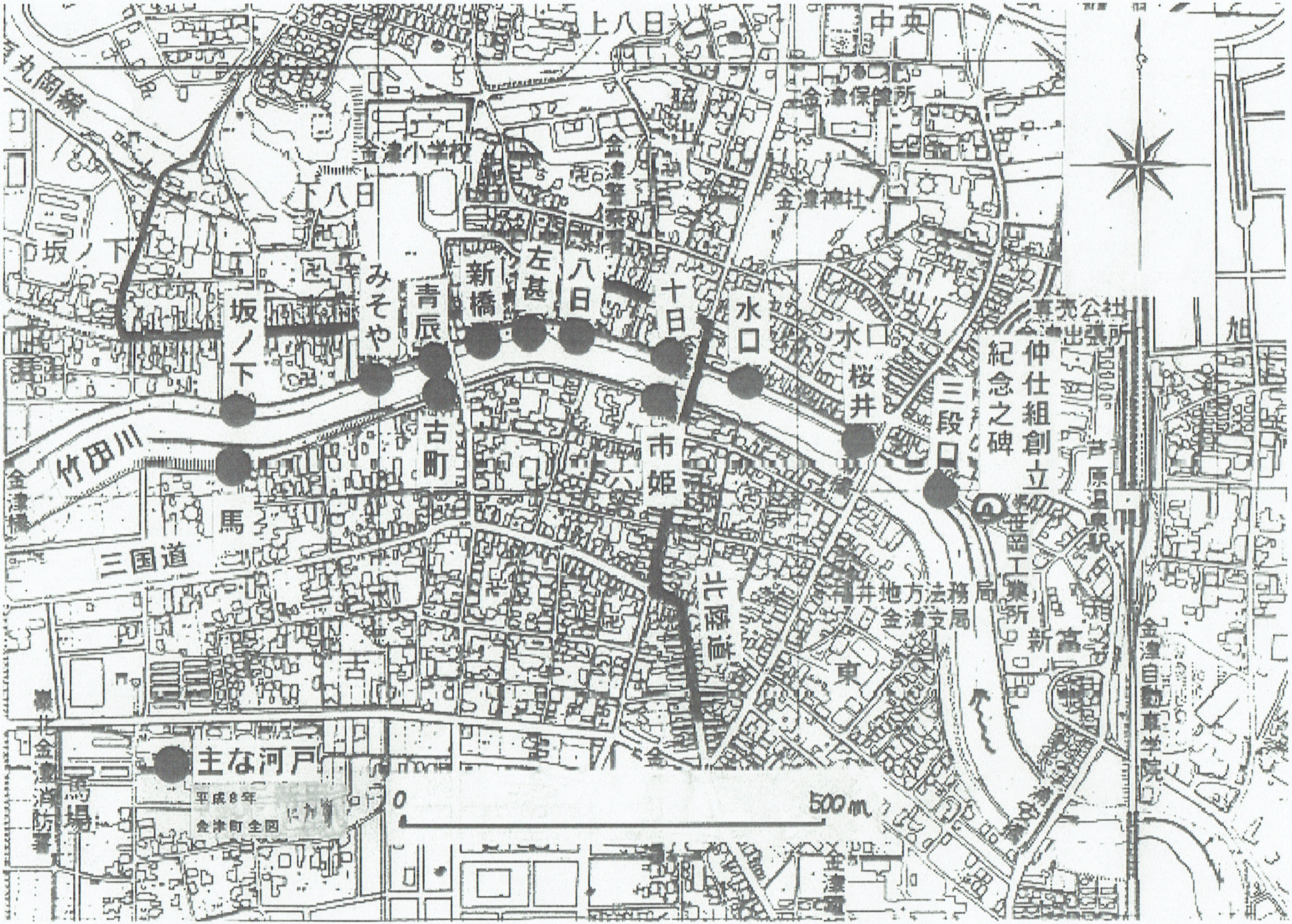


図４　金津の河戸　金津町「金津町全図」（平成８年）に加筆

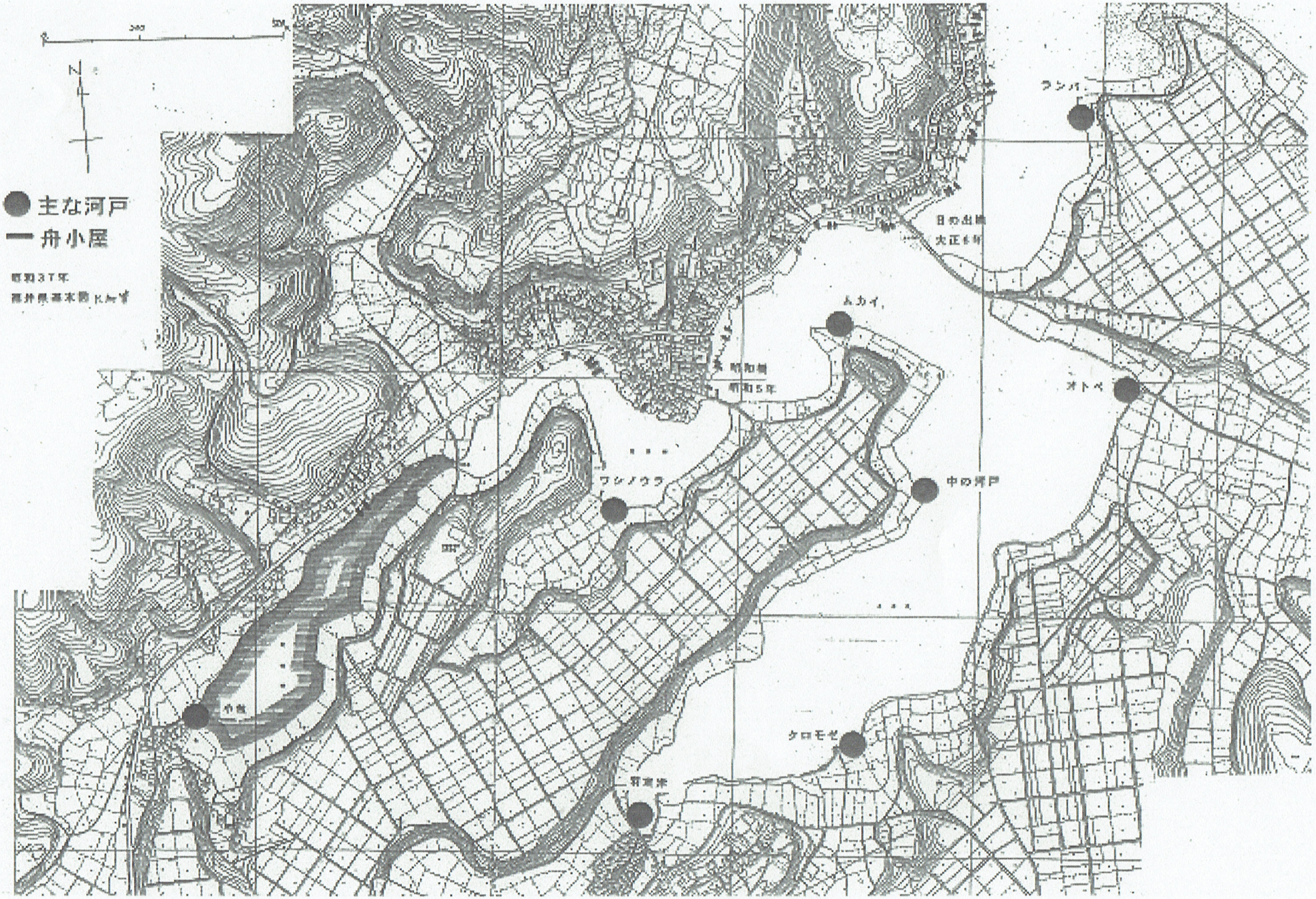


図 5.北潟湖の河戸　昭和 37 年福井県基本図に加筆

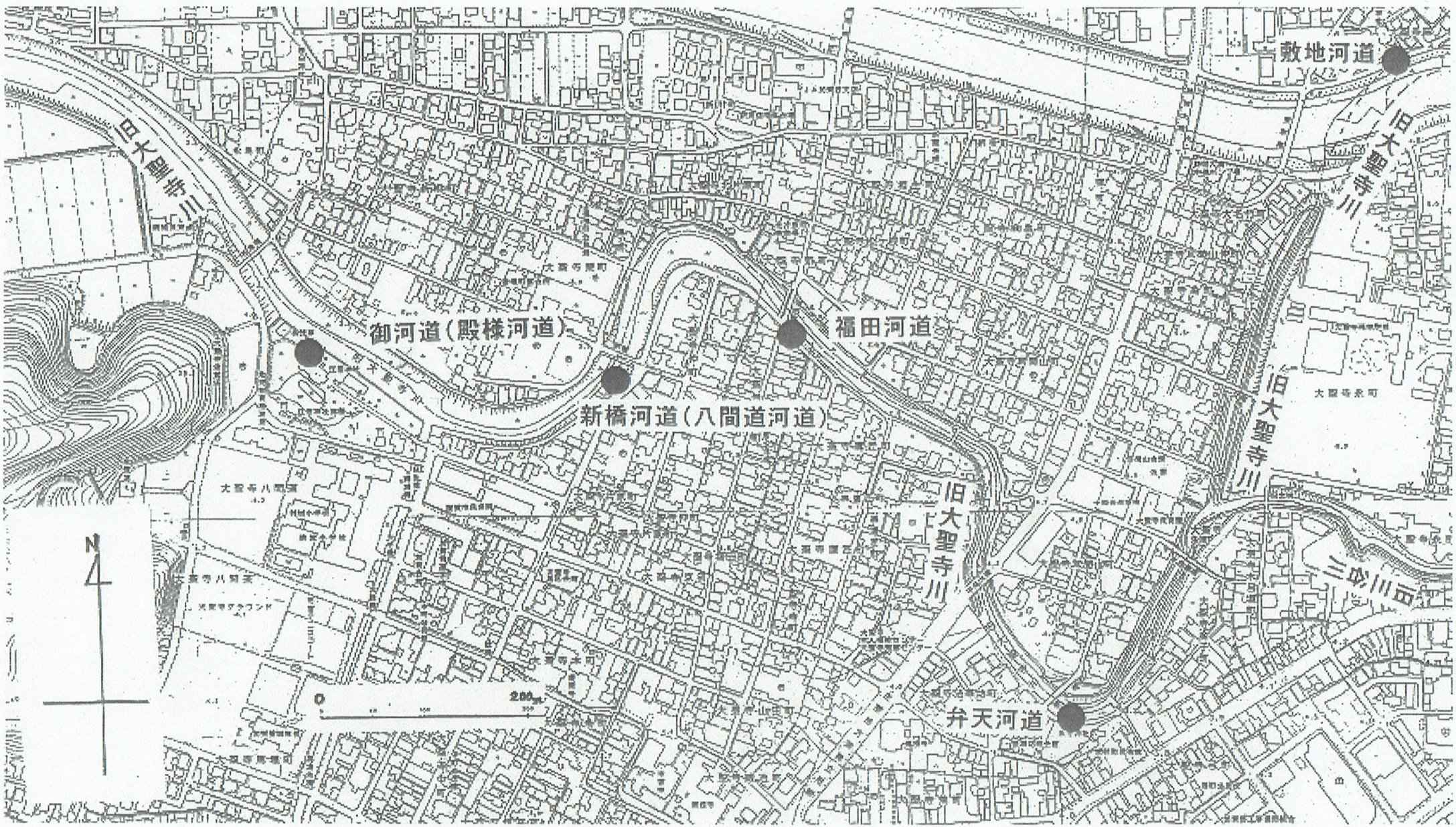


図６.大聖寺の河戸

平成 24 年加賀市「加賀市都市計画基本図」に加筆